

悦びしに、翌年の春、全家温疫を病み、其上相續とすべき盛仁の嫡子を失ひ、普請に散財し、先祖傳來の住居を變じたり、其大不幸何によつてか避ることなきや、然共其惑いよく解す、益家相を淫し、人にも勸む、其男は予が知れる百姓にて、村長をも勤め、伶俐なる男なり、

〔閑憲瑣談一〕第一 金神家相の論

近世、家宅の相を撰事行れて、萬家多くは此所爲に泥其道に通達せる徒に付て、一向に居家の安全を秤、然ば貴賤と雅俗を不論、宅相の吉凶に依て、身上に祥と不祥を現然に得ると云徒不少、於是方位家相を卜するの徒、禍福當祟を囂く云募、八方金神の祟、本命的殺の論嘈々たり、既に家相の禁忌なくとも、曆道に二十四方位の方角など、無量吉凶、日取の善惡多くして、撰除事不容易、是乍併、我朝古代の風にはあらず、昔唐土にて、道士等が祭初たる事にして、青龍、白虎、朱雀、玄武の稱を弘む、是なん世に知る四神の名目、東西南北に配當なせる方色にて、青白赤黒の形を表するのみ、

〔兎園小説五〕家相談

近年我邦も、亦家相の學行はれて、病難を救ひ、火難を免かれ、其術に心服する者少からず、衆人の歸する所、其功驗なきにしも非ず、余是をある人に聞けるに、曰、嘗て松永宗因、藥研堀にて、家宅を買ひ求めて移らんとす、其日濱町會田七郎宅にて、金蘭に邂逅して、家相の談に及び、其言に服し、其判斷を請ふ、金蘭一見して、家に死骨有り、此に住む者必ず病死之由申す、宗因畏慎て、其家に移らす、直に人に譲りけり、女隱居の其家を買ひて移りたる者、一月餘にして病死せり、其後醫生有り、其家を買ひて此に住みけり、程なく是も亦病死せり、金蘭又久松町河岸へ行きて、其長家の、病氣長屋の由を申し、聞直すべき由申す、然處其言にも従はずして、後果して如之、○中略

乙酉八〇文政 五月朔

中井乾齋誌